

湖から広がる良き出会いの連鎖～何も選ばなくて良かった

点ではなく線になること。点と点を結ぶ線ではなく、動く線になること。世の中を変える良き出会いの連鎖を生み出すのは、動く線だ。偶然だが、霞ヶ浦に自生しているアサザという水草は、動く線のイメージと見事に重なる。

アサザの生態はおもしろい。アサザは、降雨が少なく湖の水位が低下する冬季に水面下から現れるアシ原の地面(露出した湖底)にタネが漂着して、そのまま地表で冬を過ごし、春になるとタネ(点)から芽を出し、葉を出す。アサザ水草だが、水の外で芽生えるのだ。アサザのタネは光や温度の変化が少ない湖底では発芽しない習性を持っている。芽生えた陸地でしばらく生育してから、やがて、梅雨になり水位が上がって株が水没すると一気に沖の深い方に向かって地下茎(動く線)を伸ばして広がっていく。沖に広がり湖底にしっかりと根を張ると、地下茎の節々から四方八方に湖底を這うような茎(ネットワーク)を延ばし始める。延ばした茎の節々からも根を出し、それぞれの節々から細い葉柄を伸ばしてその先に水面に浮くハート型の葉を出す。その様にして、アサザは湖面に無数の葉を浮かべ群落をつくり、夏から秋には一面に黄色い花を咲かせる。黄色いお花畑の下には、湖底を縦横に走り無数に交差する地下茎のネットワーク(中心の無いネットワーク)がある。大きく広がったアサザ群落を見ても、最初の株(基点)がどこにあったのかは分からない。その基点(起源)求めても見つからない。

わたしたちが普段目にするアサザは水面に浮かぶ無数の点である。それらは、湖面で静かにゆれるハート型の葉や黄色い可憐な花である。しかしそれらの無数の点は、細い葉柄や茎をとおして湖底を縦横に走るネットワークに繋がっている。そのネットワークは、水中に入らなければ見ることができない。

また、このようなアサザのあり方を理解するには、岸辺の点から沖に向かう動く線になり、水中で中心の無いネットワークへと生成していくプロセスの中に入らなければならぬ。点で覆われた湖面の下にある湖底には、別の世界が潜在していることを感じ取らなければならぬ。湖面で揺れる無数の点は、その下に潜在する基点の見えない動く線へ、そして、中心の無い動的なネットワークに繋がっているのだ。

「多少とも自然の生きた直観に到達しようとすれば、われわれ自身がこの自然の示す実例そのままに形成を行えるような、動的でのびやかな状態に身を置いていなければならぬ。」もしも、わたしの中でアサザのイメージが芽生え動く線になっていなかったら、ゲーテのこの言葉に出会うこともなかっただろう。そして、もし私の中に、点としてあったアサザが芽生え動く線に成る場がなかったら、その後の良き出会いの連鎖も起きなかったに違いない。

芽生えの場とは、雨の恵みを得られずに水位が下がり、それまで水面下に隠されていた湖底の一部が露わになった場である。タネは水の外で霜や寒風に晒され日々の変化を感じることで、芽生えることができる。

湖底とは、中心の無い動的なネットワークが潜在する場だ。アサザは、自分の中に潜在するものを露わにして外に晒すことで、点(タネ)が動く線に変わり、自分を場として開くことができることを、そして、自分を場として開くことで良き出会いの連鎖が起きることを、わたしにひとつのイメージとなって教えてくれた。それは、霞ヶ浦の広大さを前に途方に暮れながら歩いていた私にとって、本当にひとつの出会いであった。

「出会い」という言葉が漠然とわたしの中に浮かんできたのは十代後半だった。その頃わたしという場をとおして、様々なモノやコトの出会いが生じていることに気が付き始めたからだ。それは、不思議な体験だった。わたしが求めているものが、わたし

が自分の中のもやもやしたものを捨てずに維持していると、向こうから次々とやって来たからだ。わたしは、その様にして向こうから来たものを夢中になって学んでいった。それが本当に「知ること」であり「理解すること」「学ぶこと」ではないかと、思い始めた。

知を予め体系化された知として受け入れるのではなく、知を良き出会いの連鎖によって徐々に形作って行けばいいという微かな確信が、わたしの中で芽生えていった。何も選ばないで、もやもやの中を生きる。体系の外に在って起きる出会いの中で芽生えて来るものを頼りに。その頃から「良き出会い」を求める手探りの歩みが始まった。選択よりも、もやもやが大事の生活だ。「出会いの機会」を見逃さず忠実に生きること、つまり「独学」を決めたのはその頃だった。

だから、わたしは霞ヶ浦をもやもやと一緒に歩く中で、アサザと出会うことができたのだと思う。動く線であるアサザとの出会いが、わたしが自分自身について今このように語ることを可能にしてくれているのだ。「動的でのびやかな状態」に、「動く線」になることが、わたしの理想であった。動く線は、点と点を結ぶ線ではない。そこには保証するものも、公認するものも無い。その行き先も分からない。動く線とは、基点となる不動の点（権威）とは無縁な線をいう。つまり、あなたは何者ですかと、よく質問される。そして、わたしの素性を知った途端に、馬鹿にする者もいた。

評価（基点）に依存する者は、動く線にはなれない。自分という場を、点の中へ収納してしまうからだ。良き出会いの連鎖を求める者だけが、自分を出会いが潜在する場として開くことができた者だけが、動く線になることができる。動く線になることは、世界の広がりと共に生きることである。

このプロジェクトは湖でのアサザとの出会いから始まった。広大な湖と流域に展開するプロジェクトを可能にしたのは、アサザが与えてくれた動く線というイメージである。だから、わたしはこのプロジェクトを、アサザプロジェクトと名付けた。

動的でのびやかな線は、「点と点を結ぶ線」では不可能な想定外の出会いを次々と生み出していくことができる。点と点を結ぶ「可能性」の下に沈んでいる、広大な「潜在性の海」の中に飛び込んでいくことで、新たな発想が次々と得られる。

ハート型の葉や黄色い花のひとつひとつが無数の点となって浮かんでいる湖面の下には、それらの点につながり湖底を縦横に走る地下茎があることを、人は湖に飛び込まなければ知ることができない。その湖は、かつて流れ海と呼ばれていた。流動する海だ。

「良き出会いの連鎖」という言葉を、わたしは最近になって17世紀のオランダの哲学者スピノザの「エチカ」から得た。「人々は良きにせよ悪しきにせよ、自分に何が出来るかを知らない。」わたしが好きな言葉だ。

エチカは20世紀の哲学者ドゥルーズの言葉を借りれば、人が成すべき事の理論に対する、人が成し得る事の理論を提示したものである。人が成し得る事とは、良き出会いの連鎖をとおして、自分と共に世界を変えていくことだとわたしは思う。それは自分を場として開けば、誰にでも出来る。自分の中で起きた出会いに気づき、素直に驚き、共感し、喜びを見出すことから始めればいい。つまり、感じることから始めればいい。そして、出会いの喜びに促されながら、さらに良き出会いの連鎖を求めて、さらに少しずつ自分を場として開いていくことができれば、自分に成し得る事が必ず見えてくるはずだ。個々の人格が場として機能するネットワークが、そこから世界へと何処までも展開していく。

種は蒔かれた。いつどこで芽生えたのか、忘れ去られる種がすでに蒔かれている。

